宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311㈹
定価　一年送料共　1000円

沖・中両宮春季大祭

子供相撲大会も催され

一週間程続いた「なたね梅雨」も上がり、陽光ふり注ぐ絶好の祭典日和に恵まれた四月二十五日、当大社中津宮・沖津宮の春季大祭が厳粛に斎行された。

大祭に先立ち、先ず二十三日小雨の中御嶽神社、沖津宮遥拝所の社殿、境内の清掃と大祭神饌の鏡餅奉製が、沖中両宮奉賛会、同敬神婦人部の奉仕により行われた。

翌二十四日、前日迄の雨もようやく上がり、早朝より奉賛会、婦人部が総出で注連縄張り替え、紫幕張り、幟立て、直会準備等の大祭諸準備を奉仕、更に翼賛会が神賑行事奉納子供相撲大会に備え土俵作りを奉仕し、午後一時過ぎには準備万端整った。

午後三時、中津宮境内にて目原奉賛会長以下役員が参列する中、地主祭を斎行。

同五時、太田権宮司以下三名の神職奉仕により、沖津宮遥拝所にて沖津宮大祭宵宮祭を、義父宮司以下四名の神職奉仕により、中津宮にて中津宮宵宮祭を各々斎行、明日執り行われる両宮の春季大祭が無事斎行されるよう祈念した。

大祭当日の二十五日、新緑鮮やかな筑前大島は、晩春の暖かな日差しに包まれた。午前八時三十分、先ず宮崎区に鎮座する厳島神社にて春季大祭を斎行、宮本副会長以下地元氏子多数が参列し、海上安全と今年こそは豊漁をと大漁満足が祈念された。

続いて同九時、義父宮司以下神職四名、巫女三名の奉仕により沖津宮春季大祭が、奉賛会役員、宗像大社氏子会代表外地元の氏子多数が参列する中、沖津宮遥拝所に於て斎行され、遥か五〇㎞沖合の沖津宮へ敬虔な祈りが捧げられた。

更に同九時三十分、筑前大島最高峰の御嶽山々頂に鎮座する御嶽神社に於て、太田権宮司以下神職一名の奉仕により、目原奉賛会長、河野宗像郡市神社総代会長、JAむなかた大島支所長、宗像大社氏子会代表外農業従事者、氏子多数参列の元御嶽神社春祭を斎行。本年の豊作が祈念された。

午前十一時、中津宮に於て島内外の氏子崇敬者百数十名が参列する中、中津宮春季大祭が斎行された。定刻宮司以下参進、拝殿所定の座に着座し祭典を開始。

祭典は修祓の後、皇室・国家の安泰と弥栄、国民の平穏、更には海上安全、漁業繁栄、五穀豊穣を祈念して宮司が祝詞を奏上、次に村内氏子を代表する板矢純氏子奉賛使が奉賛詞を奏上、次で巫女二名が浦安舞を奏し神慮をお慰め申し上げた。その後宮司以下祭員、板矢氏子奉賛使が主車拝礼を行い、続いて目原会長、河野会長、氏子会代表、杉田村長、遠藤議長を始め各界各層代表四十名余りが玉串を奉奠、大神の神恩に感謝すると共に、昨年は例年にない不漁・不作の年であっただけに、今年こそは豊漁・豊作でありますようにと敬虔な祈りを捧げ、祭典は滞り無く執り行われた。

祭典終了後、席を照海殿に移し直会が催された。直会は宮司挨拶の後、杉田村長の音頭により乾杯、列席者は和気藹々の一刻を過ごした。

午後一時三十分、中津宮境内の土俵に於て、神賑行事奉納子供相撲大会を開催。相撲大会には大島小学校児童全員七十五名が参加、安水校長の行司により取組が進められた。男子児童は全員まわしを締め込み、すっかり力士の雰囲気で参加、最初は各学年、男女別の総当り戦、続いて勝抜き戦が行われ、三人抜きの勝者には賞品が贈られた。土俵周囲は父兄、氏子の観戦者で埋まり、子供達の熱戦にさかんに声援を送ったり、ビデオやカメラに奮戦をおさめたりと、子供達以上に興奮しているようであった。

奉納子供相撲大会も午後三時過ぎには終了、本年の沖中両宮春季大祭も、神前に海の幸、山の幸を盛沢山にお供えし、村民の誠心誠意な奉仕のもと、無事盛大に執り行われ、漁止めの筑前大島の一日は終日大いに賑った。

今年も、入試や卒業式の季節が終はって、学園に新入生を迎へる季節がやってきた。皇学館、国学院両大学をはじめ、各神職養成機関でも喜びの中にもちょっぴり緊張した、将来神職を志望する若者（ばかりでもないだらうが）の姿が見られたことであらう。筆者が奉職する国学院大学でも一・二部の神道学科をはじめ、専攻科・別科を合はせて二百名ほどの新入生を迎へることになった。これらの新入生のすべてが神職を目指して入学したわけではないだらうが、その多くが神道を学び、神宮・神社実習等を修了してやがては神職になっていく。とりわけ、両大学の神道学科や専攻科は、将来の神社界の指導者たるべき高等神職を養成する機関でもあるので、筆者等神道学科に所属する教員は毎年のことではあるが、新入生には大きな期待を抱いてゐる。さて今年はどんな学生が入ったことやら、当方も学生同様不安と期待で胸が一杯、といへば少々大げさであらうか。

○

ところで、いふまでもないことであるが、国学院の場合、神道学科の新入生といってもいはゆる社家の子弟や当初から神職志望の学生ばかりでなく、その半数以上は神社界とはほとんどゆかりのない学生である。むろん神道学科は神職養成を主目的として設置されてゐるわけではないので、別段神社に無関係であったり、神道に素養がなくても、入試に合格さへすれば入学出来る。だから中にはいろんな思想・信条や信仰を持った学生もゐることだらう。これは筆者にとって喜ばしいことでもあり、また同様に悩みでもある。

様々な個性や思想・信仰を持った学生に対しても、神道を学問として客観的に教授することはさほど困難なことではない。講義中に時には、個性的な学生や明らかにある思想・信仰を持ってゐると思はれる学生から、鋭く意表を衝くやうな質問や意見が出る場合もある。当方も必死で説明することになる。これはこれで一種の刺戟ともなり、教師の喜びでもあるが、他方では、神社や神社界にふあるを程度共通の意識や連帯性を重視する組織体の中で、彼らがもし神職になったらどういふ立場に置かれ、いかなる視線を浴びるやらと心配し、悩みもする。

○

新入生の季節に想ふ

このことに関して、ふと本紙前号の「主張」で宮崎義敬宮司が述べてをられることに改めて興味を持った。といふのは、宮崎宮司が「強烈な個性」を持った先輩神職たちが次々に帰幽され、「あのやうな人物はもう出ないのではないか」と真剣に案じられてゐるからである。神社界から「個性豊かな宮司」が減少し、やがては消滅した時、一体神社界はどのやうな世界として世間に映るのだらう。中には、葦津珍彦先生が指摘された無味乾燥な「官僚神道」の再来を想定する人もあらう。逆に、個性など神社界には必要ない、組織の論理を重視し、個性を押し殺して組織のための一歯車として奉仕することこそが使命である、と力説する人もあらう。この意見は無機的で、非情に聞こえるが、さうした意見が実体験から出てくるものとするならば、これはこれで十分傾聴に値しよう。

○

個性重視による神社界の活性化か、それとも没個性に徹した組織の論理の重視か。筆者はここで二者択一を神社界に求めようとは思はない。それは各神社、各宮司、各神職が選べばよいことであって、筆者が嘴を挟む筋合ひのものではない。だが神職養成の一翼を担ふ国学院の神道学科の教員としては、「主張」すべきは主張するのが責務であらうと考へ、以下若干の感想を述べさせていただく。

個性を発揮しつつ組織の調和・維持と発展を期することは決して二律背反ではない。あの神社本庁設立に際して、多くの個性的な人材がそれぞれの個性を発揮しつつ、組織としての神社界の団結と発展を模索し、今日の神社界の発展と安定の基盤を築いたことは紛れもない歴史的事実である。そしてその要因・背景には―たとへ官僚神道の時代であっても―、これらの個性的であり、かつ組織を重視する人材を輩出することを可能にした、神職養成の機関・コースが多様に存在したことが挙げられる。二年後には本庁設立五十周年を迎へるに際し、本庁でも神職養成の在り方に対する抜本的見直しに着手してゐると聞くが、個性と組織の論理を合はせ持った神職を養成するためにも、そしてこの春、希望に燃えて神職としての教養と人格を陶冶するために入学した学生のためにも、よりよい方策を神社界の総意で実現してもらひたい。宮崎宮司の「主張」を決して無にしないためにも。

（神社新報）

余滴

人間の欲望は生命の有る限り尽ない、中でも名誉、地位、利権に対する欲望は強欲で危険なものである。

欲望も己の立場だけに固持するのではなく、自己を切磋琢磨して更なる飛躍を遂げんとするものであれば万人の認める処である。

己を厳しく律する事無く、他人の失態、中傷、揚げ足等を図り優位を期し、安泰を求める自己中心的な欲望は、一時的には野原の草木に宿る夜露の如く輝き渡るが、月が没すると光は失せ単なる水滴となって消滅する。闇夜を照らす月の存在が大事でその光を受け輝く露は主役とは成り得ない。

太陽、月、水と普遍性の高いものは日常では当然の事として受け止められる。この当然の事が当然で無くなると天変地異、疫病飢餓となり生命の危機を迎え欲望は強欲化する。

今日の政治を見ると正にこのことが言える。政治を司る政治家が国家国民を忘れ、己れの欲望のみに狂奔をなし、百鬼夜行の如き醜態を国内だけでなく世界に晒らしている。

我国は建国以来の長い歴史の中、公平無私・国家国民の繁栄安泰を聖旨とする万世一系の皇室の下に、国民が一致協力して幾多の国難を乗越え、国体を護持して来たのである。

今日程、国民一人一人が民主主義の根幹である「主権在民」の力を発揮し、真の政治家を選び国家の平穏と世界の平和に寄与する政治を希求する時である。

「天地の神にぞ祈る朝凪の
海の如くに波立たぬ世を」
昭和天皇御製

第三九五回　宗像大社歌会詠草

中村吾郎選　毎月末日〆切

大島　杉田　禮子
筆太く子の名書きたる表札
あり一人住いの媼の家に
（評）少し行き過ぎて振り向いた時点で成つた作品ではないか。媼の思いは筆太くと表現された中に潜む。

福岡東　桜井　ツ子
裏戸の隙にあかあかと日の
差して安けく在りし日の夕
づきぬ
（評）戸の隙から差す夕日の『あかあか』とした光に作者は安らぎを覚えた。適確な表現は一首を生かす。

大島　目原　節子
北帰行におくれし鴨の一群
の今朝早立ちか浜に影なし
（評）飛立って一羽もいない鴨に『今朝早立ちか』と呼びかけた処など実によい。先行の鴨につくのも近い。

田熊　鷲頭かつ代
うぶごゑのあがりて間なき
かの家に武者幟立ちはため
きてゐる

日の里　後藤　君代
筥崎の社の庭で遊ぶ鳩群れ
ては睦み遠くへは飛ばず
目の前の海すでに昏れ冬空
に雪を伴ふ雷緊く鳴る

福間　山田よし子
流れ来し黄砂に野山はぼか
されて松の枯木も見定めが
たし

吉留　白木うめ
棒縞の布にて作業衣作りた
り鏡の前に暫く立てり

土穴　瀧口　敦子
満開の椿に集ふ蜜蜂の音光々
し朝光の中

名古屋　小田　喜一
来るという証あらねどつば
くらめかえり来て今朝の心
やすらぐ

鐘崎　安永　久子
握りしむる指おもむろにみ
どり児は補育器の中白き手
ひらく

吉留　高山　信子
香につられわが歩むとき黄
なるもの柊南天そこにある
なり

大島　河野　英子
挿根せし柳は若葉育みて厨
の窓に風に揺れをり

武丸　中村さつき
神棚の榊の水を日々替えて
新芽出でをり執念の如く

赤間ケ丘　松本　澄子
光りつつ翳になりつつ白鷺
は山に向ひて悠々と飛ぶ

大島　越智　治子
凍てつける冬の夜空に波止
先きの標識灯の煌めき眩し

徳重　石松や寿子
郡山相模原市の大学へ二人
の孫は家はなれ行く

福岡東　清原　絢子
ポピーの赤霞草の白交々に
展がる園に心を放つ

自由ケ丘　細川　絢子
雨上りの日ざし庭面にやは
らかし樫の葉すべてに光り
ゆれゐる

赤間ケ丘　中武　あさ
なつかしき感触のあり足裏
に舗装半ばの砂利道を行く

名古屋　小田　留子
駅までと送りて呉れし娘と
孫に他人の如く謝して別れ
ぬ

自由ケ丘　津江富美子
春めきし風の吹きくる田圃
路菜の花群がしげくゆれゐ
つ

福間　本松　宣子
病むといふ程のことなく古
稀となる夫に老医は入院を
告ぐ

福間　池浦千鶴子
榊の水替へて長めに祈りゐ
る夫の持病の検査日なれば

神具・装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡店　福岡市博多区東公園一－三一（〒812）
電話　福岡（92）六五一－九四五六番
本店　京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話　京都（35）三四一－三四一㈹－四番

浜宮・皐月祭斎行

端午の節句の五月五日に

全国で端午の節句（子供の日）として祝われる五月五日、当社では恒例祭の一つである浜宮祭並びに五月祭が神湊の浜宮と江口の五月宮に於て斎行された。

当日の早朝は、雲行きも悪く雨が心配されていたが、午前十時に浜宮、同十一時に五月宮の順で祭典は行われた。

まず、浜宮に於て宮司をはじめ神職五名が奉仕の下、段天区々長、地元総代を始めとして小山県議、和田玄海町長等の地元の有識者、地元住民とその子供等と多くの人々が参列した。神前には、赤飯や菖蒲酒、粽などの節句にちなんだ神饌が特に供せられ、宮司祝詞奏上の後、玉串拝礼が順次行われ、祭典は滞り無く終了した。

続いて子供等による奉納相撲大会が開かれ、日頃腕白の玄海っ子がその力と技を競い、観戦者を大いに賑わせた。

次いで祭場を江口の五月宮へと移し、五月祭が斎行された。五月宮は、玄界灘に注ぐ釣川の河口の近くに神籬が祀られており、さわやかな潮風が吹き渡る中、氏子会代表、江口区長等が参列して執り行われた。

祭典終了後、五月寮に於て直会が行われ、宮司以下神職、参列者が集い、歓談の一刻を過ごした。

膳には、古式に則り、栗箸が使用され、赤飯の握飯に粽、ガメの葉饅頭といった季節の食物が彩りを添えた。

また、五月宮の祭典終了後、江口の鎮守、辻八幡宮で五月祭が斎行され、江口区の総代他多数の氏子の人等が参列した。

五月祭は、古くは「五月会」と呼ばれ、秋の「放生会」と共に当大社の一大神事であった。

当時の祭典は第一宮、第二宮、第三宮と織幟神社、許斐宮の五社の神輿が浜宮へと御神幸を行い、盛大な神事が行われていた。

この五月会の神事が端午の節句の五月五日、浜宮・五月宮に於て、今もなお連綿とその精神が受けつがれている。

宗像神郡では、この祭を終えると田植の季節となる。水田に水がひかれ、早苗が植えられて、急ぎ足で夏が訪れる。

昭和祭斎行

国家・国民の弥栄と平安を祈念し

四月二十九日、常に国民の幸福と繁栄に想いを馳せられた昭和天皇の、尊き御聖業を讃え祀る昭和祭が厳粛裡に斎行された。

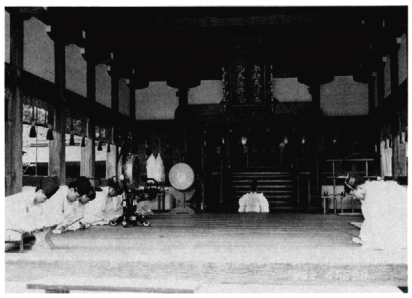
「みどりの日」でもある当日は好天に恵まれ、多くの参拝者で境内は賑わった。

若葉の生き生きと萌え渡る中、午前十一時養父宮司以下神職、参列者が祭庭を参進し祓舎にて修祓の後、拝殿所定の座に着座し、祭典が開始された。

養父宮司より昭和天皇の御聖徳、御聖業を讃え、又皇室の弥栄と国家国民の恒久平和を祈念する祝詞が奏上された後、昭和天皇の御製で皇紀二千六百年奉祝の記念に制定された浦安舞が、当大社巫女により優雅に舞われ、しばし参列者の足を止める事となった。

戦後半世紀を過ぎようとする今日、昭和天皇の万物万世に平和を、との御聖徳により国家国民は未曾有の危機を乗り越えてくる事が出来た。常に国民に多大なる想いを寄せられ国家の再建、文化産業の促進、安定が成されたのは、真に昭和天皇の御存在が国民の大きな精神的支柱であったからに他ならない。我国が今日世界に於て重要な位置を占め、更なる飛躍を望むに際し、昭和天皇の御聖徳を今一度初心に返り考えてみるべきであろう。

祭典は養父宮司をはじめ、氏子崇敬者、当大社奨学金受給生等を代表とし、この偉大なる昭和天皇の御聖徳を偲び、平成の大御世と皇室、国民の限りなき弥栄、平安を心から祈念し、玉串を御神前に捧げ祭典は滞り無く終了した。



平成六年度

宗像大社奨学生奉告祭

若葉薫る四月二十九日、「昭和祭」が厳かに斎行された。

（平成六年）第三十五期生の宗像大社奨学生選定書が宮司より手渡された。

宗像大社奨学制度は、去る昭和三十四年、今上陛下（当時皇太子）御成婚を記念して、昭和天皇の御誕生日（天長祭）に第一期生が宗像郡内中学校（当時は大島、玄海、中央、赤間、福間、津屋崎）六校から学校長の選定により各校一名が選ばれ六名の奨学生が誕生した。現在では宗像市郡内十中学校となり、選定者も各校二名に増員され、毎年二十名の奨学生が選ばれている。

平成六年度に希望高校入学時に合せ選ばれた奨学生は次の通りです。

宗像大社奨学金受給生
第三十五期生名簿

大島中学校
沖西　良太　香椎工高校
古賀　京子　博多高校
玄海中学校
中山笑利加　光陵高校
占部　奈緒　光陵高校
日の里中学校
吉武　浩平　九州高校
河東中学校
熊谷　瑠美　青山女高校
池田　幸代　折尾女高校
城山中学校
山本誠一郎　宗像高校
平山　杏子　宗像高校
自由ケ丘中学校
三小田　覚　八幡西高校
佐々木誠之　香椎高校
中央中学校
吉武美由紀　玄界高校
松尾　岳　九州高校
福間東中学校
山崎　光恵　玄界高校
中野　春美　博多高校
福間中学校
坂口　里会　東海第五高校
白武　学　玄界高校
津屋崎中学校
濱津　知佐　西南学高校
岡田　寛　福岡高校
以上の学生各位です。

辞令

平成六年四月一日付で若干の異動が発令されましたのでお知らせ致します。

尚、該当者以外は従来通りです。

◇庶務部
庶務課員
権祢宜　伊藤　佳和

◇祭儀部
儀式課員（新採用）
出仕　佐々木大治
出仕　大坪　國明
賽務課員（新採用）
巫女　狩野　栄子
巫女　高木　加良
以上

各地奉斎

宗像神社春祭

㈱新出光春祭

四月十九日午前十一時より恒例の株式会社新出光春祭が福岡市博多区の新出光本社ビル屋上にある宗像神社にて厳粛に執り行われた。

当日早朝、奉仕神職は同社へと向い祭典準備を行い定刻に太田権宮司以下奉仕神職二名は祭典を開始した。太田権宮司が神徳の発揚、皇室、国家の安泰、株式会社新出光の業務の安全と繁栄を祈る祝詞を奏し、若杉健太郎会長以下重役諸氏、社員代表等多数参列し、敬虔なる祈りを込めて玉串を捧げた。

此の神殿は「会社事業運営の中心となる会議を神前で誓うと共に、神明の加護により社運隆昌と社員一同の健康を祈念する」との趣旨に基き守護神として宗像神社並に稲荷神社を奉斎してより今日迄、御神徳の加護と全社員一丸の赤心により社業も年々繁栄して来たので、守護神の両神社を会社の象徴である本社ビルの最上階に建立し、更なる発展を祈念して約三十坪の境内地を設けたもので、現在の社殿は平成元年に新しく遷座され、宗像大社の社殿同様「流造り」で建立されている。

祭典終了後、別室にて当大社太田権宮司の乾杯の発声により直会が催され和やかなひと時を過ごした。

門司油槽所春祭り

去る四月十三日午前十一時より、北九州市門司区新門司の出光興産株式会社門司油槽所に鎮座する、宗像神社の春祭りが斎行された。

門司油槽所では、春・秋二回の吉日に当大社より神職が出向し奉仕するのが慣例となっている。当日は升谷祢宜外神職二名の奉仕により厳粛裡に祭典が執り行われた。

春祭りは、うららかな春の日ざしの中、栗田全教所長を始め関連会社の代表並に油槽所従業員多数参列し、定刻午前十一時、升谷祢宜以下祭員は、神殿に参進、開式の辞の後、修祓の儀を行い、続いて斎主が、同油槽所の業務安全・業務繁栄、従業者の無病息災を祈念する祝詞が奏上された。

引き続き、斎主、栗田全教所長外参列者の玉串拝礼が行われ、神前に敬虔な祈りを捧げて、祭典は滞りなく終了した。

祭典終了後、同油槽所内の一室にて直会が行われ、和やかな雰囲気の中、楽しい一刻を過ごした。

一誌一話 (34)

済州島の風物

樂　岑　子

前号で伽倻訪問地も終り。

済州島は東洋のハワイといわれ、外国人旅行者が多くなった一方、最近は韓国の新婚旅行のメッカとも聞いていた。島に入ると確かに、島内はどこも民族衣装のチマチョゴリで着飾った花嫁さんで一杯で、花が咲いたように華やいでいる。もう一つ、同様に目に飛び込んできたのが、石像〝ドルハンバル（守護爺・神）〟である。

済州島は今も神話と伝説とが存在する神々の島で、民族学上の宝庫と言われている。この中で人々は伝統を受け継ぎ、守り続けながらの生活であるという。島の至る所に立っている守護神ドルハンバルは、漢拏山の噴火によって流出した熔岩を用いた石像彫刻である。石神は多くの彫り込みで顔いっぱいに微笑みを湛えて、融和な表情を持った等身大の老人像である。石像に人人は、「石のおじいさん」と呼びかけ、親しみを持って共に過す。像は村を災厄から守る神であり象徴である。ドルハンバルは、日本で古くから民衆信仰の中で広く親しまれ愛されてきた道祖神を、石像として祀っているのと同様である。

日本の道祖神は村里への入り口にいて、境の神・道の神となり外部から入る悪霊を防ぎ外敵を退治し、人人を守護する神として祀られてきた。後に家族の一員とされ、「種々神」となって信仰を集め親しまれてきた神である。いまも村境・辻境・峠などの各所で、それぞれの神として石像で祀られている。

道祖神と同じ神、済州島のドルハンバルは、今は辻や木戸口に立っているだけでなく、大小様々な大きさに造られて、装飾品となり土産品としても大いに利用されている。オーバーかもしれないが、現在は済州島の外貨を稼ぐ神様でもある。

島の感じがゆったりとおおらかな牧歌的であるのは、暖かな潮流が周りを囲み、亜熱帯気候の島としているせいであろう。普通は住み良い海洋型気候風土であるが、沖縄と同様にここも台風銀座となる。シーズンともなると暴風豪雨の直撃という。その為多くの家は屋根を低くし、高くした土塀で囲み、屋根という屋根はほとんどが重石を置き、網を張り巡らしている。

火山灰でできた土壌が熔岩に覆われて平地も乏しく、河川もほとんどが乾川である。その為集落は海岸に密集して、生活水は湧泉によっている。主産業の農業は立地条件がともなわず零細である。勿論水稲栽培はだめである。

我々が訪れた時の畑一面を、キムチの材料のニンニクと白菜が占めていた。昔から朝鮮半島の食卓にはキムチが盛られ、これが食生活の風物詩を演出してきている。いまキムチは日本人旅行客の韓国帰りに欠かすことの出来ない土産品の一つである。これを産する畑と畑の間の畦は、熔岩礫が積み上げられて、簡単な境でなく石塀に様変りしている。山は太古の激しい噴火活動で熔岩礫を吐き出し、済州島を作り上げて静かに眠っているが、やはりこれをみると、活動を繰り返す桜島同様、自然の偉大な一面を見ている思いがする。

主基地方風俗舞保存会
雲仙・島原を訪ねる

恒例の主基地方風俗舞保存会研修旅行を四月二十四日から一泊二日で雲仙・島原方面で行った。

当日午後一時、宗像大社に集合した岩佐昭正会長以下参加者十名は、初夏を思わせる晴天に恵まれ少々汗ばむ程の中、二台の車に分乗して出発した。

一行は長崎自動車道路を経由し最初の目的地島原半島へと向った。先ず、千々町に鎮座する橘神社を参拝した。同神社は日露戦争に出征し明治三十七年の遼陽付近の大開戦に大隊長として戦った陸軍歩兵中佐「橘周太」を主祭神としている。神社の参道は今年三月に改修したとの宮司様のお話で、立派に整備されており本殿横には京都の紫宸殿から頂いたとの右近の橘が植樹されており鎮守の森そのものであった。参拝後は小浜町へ向い、橘湾を見渡す小浜温泉に宿泊。

翌朝、雲仙へと向い清和天皇の貞観三年に奉祝された温泉神社に参拝し普賢岳の一日も早い沈静をお祈りした。

次に、仁田峠を通り一路普賢岳へと向った。テレビでは良く見る光景であるが実際に見るとその姿は壮絶なもので噴火前とは全く違う景色になっており噴火の凄さを物語っていた。

普賢岳を後にして一行は島原城へと向い、その途中深江町を通過したが深江町の水無川周辺はあたり一面土石流に無惨にも埋め尽くされて殆んどの家が地中であった。一同も改めて被災者の方々のご苦労を痛感し一日も早い復旧を只祈るばかりであった。

深江町を後に島原城へ到着、ここでは普賢岳の噴火の一部始終の記録が残されており、中でも記録ビデオは印象深いものがあり、一同くい入る様に見入った。

大自然の美しさと怖さを思い残しつつ一行はフェリーにて三角に渡り帰福の途につき本年の研修旅行を無事終えた。

セーフティ'94
宗像交通安全大会
"おもいやり・ゆずりあいでさわやか交通"

すべての県民に交通安全思想を普及し、交通ルールの順守と、交通マナーの実践を習慣づけることで、交通事故防止の徹底を図るために、セーフティー宗像'94交通安全大会（主催＝交通安全協会等）が春の交通安全県民運動期間中の四月七日、午後一時より宗像ユリックスのハーモニーホールで関係者約六〇〇人が参加し開催された。

大会には当大社からも交通安全の啓蒙に少しでも寄与できればと、神職一名巫女三名が出向し、参加者へお守りとステッカーを授与した。

大会は、小山達生宗像交通安全協会々長、大野正昭宗像警察署長、滝口凡夫宗像市長、来賓として伊豆善也県議の挨拶の後、宗像地区地域婦人連絡協議会の山崎佳代子さんが会長代理で、「車は私達の生活に欠くことのできないものです。しかし、宗像地区の交通事故は毎年増加を続け多くの人の命が失われ、傷つき誠に痛ましく思います。

そのためには一人一人が交通社会の一員であることを自覚し、交通ルールとマナーを守り思いやりと、ゆずりあいの心を持って責任ある行動をとることが大切であると思います。

ここに注意を新たにしてセフティ宗像を実現するため努力することを誓います。」と宣言した。

引続き催物では、意見発表が行われ、東海第五高等学校三年生の中溝国久君や教育大学留学生、リズワン・アブミリティさんが自分の体験を通じ、交通マナーやルールのあり方を話した。

また基調講演では、南蔵院住職の林覚乗氏が講話し平素忘れがちである生命の尊さ、大切さを語り、参加者は熱心に聞き入っていた。

最後に県警音楽隊の演奏が行われ、大

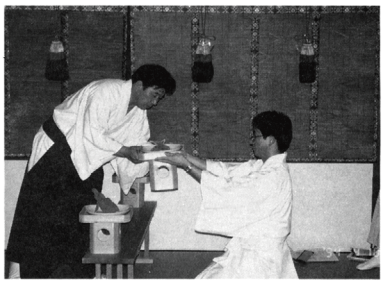
第48期店主室教育宗像研修
宗像研修を終えて

一班　川口泰宏

今まで、神道も仏教もほとんど考えたことのなかった私にとって、今回の研修は貴重な体験の連続でした。外国人にとって日本の神道が不思議な宗教（宗教というのは不適切だと思いますが）であることは当然ですが、神道を知らない日本人がたくさんいる（自分もそうだった）ことはもっと不思議なことのような気がしています。これも占領政策の後遺症といってしまえばそれまでですが、何か不自然な気がしてきました。日常生活での習慣は神道の影響を受けているのに、その意味や根本を知らないのはおかしいと思えるようになりました。五日間の貴重な体験の場を与えていただきまして誠にありがとうございました。

二班　鈴木勝也

おそらく一生に一度の体験であり、忘れられない想い出になると思います。特に、御神職の方々との語らいは、神道に対する理解を深めることができました。我々は神道＝宗教と捉えてしまい、キリスト教やイスラム教を信仰することと同じように受け止めてしまいがちですが、本社での研修により頭で理解し、宗像で体験することにより、神道は日本人の慣習なのだということを肌で感じることができたと思います。今回の研修では更に、宗像大社の由来についても詳しく知ることができました。現代においては、神社の格というものよりも、観光資源としての立地、景観に目を奪われがちですが、神話にもとづく社おのおのに目を向けていくと、日本の歴史を知ることができ、また自分が日頃お世話になっている神社への愛着も増すと思います。また、この研修で繰り返し練習した祭式作法については、今後のお参りなどに活かすことができ非常に良かったと思います。



三班　矢野耕太

形から入った研修でしたが、何度も繰り返すことによって次第次第に所作が身に付いていくのには、我ながら感心しました。うやまう心も日に日に厚みが増して来たことを考えると、日本人の血とはこういうものなのかも知れないと思いました。お宮のなかでの様々な所作や立居振る舞いは、今回初めて経験することではなく、自分の少年時代に家庭の中にあったものだという気付きも一方ではありました。今、この年齢になって、改めて清らかな心を感じるのは何故だろうか。それ位けがれた心に堕しているためだろうと思いました。宮司様のご講話にもありました「神の前で穢れをはらう」ということが、自分にとってこんなにもすがすがしさを与えてくれるとは思いませんでした。折りを見て、近隣の神社にも参拝したいと思います。また、今回、神棚を購入しましたので毎日のけじめに拝礼したいと思います。

四班　古谷直行

研修前は「神道」という言葉にかなり特殊なイメージを持っていましたが、そうではないということが、宗像大社での生活を通してわかりました。押しつけの教義はなく、自分自身で何かを感じていくことの大切さを教えていただいたような気がします。また、神道は全ての日本人の生活のペースであり、決して特殊な「信仰」ではないこともわかりました。肩肘張らず、自分の生活の中で、謙虚な気持ちになることの大事さも教えていただいたと思います。高宮での研修の時に、自分の回りに何か神聖な存在を感じることができたのは、貴重な体験でした。正座は確かにきついものでしたが、緑美しいこの宗像の地でこのような研修を受けさせていただき感謝いたしております。

社務日誌抄

四月一日～二日　宗像大社春季大祭
献上若布採取功労者表彰式
交通安全講社祭
四月一日　記者クラブ毎日新聞記者浦松丈二氏、読売新聞記者木村忠雄氏赴任挨拶の件にて来社
四月二日　宗像護国神社春季大祭
旭興産㈱代表取締役高橋博氏外十四名参拝
神湊西戌会十五名参拝
厄除祈願祭斎行
四月三日　王子神社祭
㈱新出光新入社員二五名参拝入社奉告祭斎行
春季奉納剣道大会・第十八回奉納剣道大会
トヨタ自動車九州㈱第二組立課山下課長外二九名参拝
四月五日　北九州フレンド社理事長山本アキ子氏外八五名参拝
福岡県立少年自然の家「玄海の家」次長野中浩氏就任挨拶の件にて来社
四月六日　大和運輸㈱福岡主管支店長土沼雄治氏外五〇名参拝
四月七日　セーフティ'94交通安全大会神職一名巫女二名出向於宗像ユリックス
四月八日　出光内航協議会十七名参拝
福岡県中小企業経営協会参事西村喜代子氏外六十名参拝
西日本警備保障㈱宗像支社長添田眞伸氏新任挨拶の件にて来社
四月九日　一の宮市宗像神恩会佐分けい子氏外四十五名出津宮・辺津宮参拝
四月十日　玄海町神湊寅卯会二十名参拝厄除祈願祭斎行
四月十二日　宗像大社氏子会監査
出光タンカー㈱「ダフニィオーシャン」還座
祭山田祢宜外神職一名出向奉仕於福井県敦賀市
宗像大社菊友会
四月十三日　出光興産㈱門司油槽所宗像神社春祭
升谷祢宜外神職一名出向奉仕
第七管区海上保安本部長河端春夏氏外三名参拝
出光興産㈱福山油槽所長石坂栄吉氏外五名参拝
北九州コカコーラボトリング㈱宗像営業所々長鹿島和典氏外二十名参拝
出光興産㈱福岡支店新入女子社員九名参拝入社奉告祭斎行
日の里中学校遠足六七〇名来社
四月十四日　出光興産㈱大阪支店SS経営研究会会長田嶋敏博氏外十一名参拝
四月十五日　月次祭
トヨタ自動車九州㈱代表取締役社長中村克郎氏外十名参拝
四月十七日　西日本菊花会理事会
建造物保存協会篠永氏来社
四月十八日　徳山石油化学㈱五名参拝
第四十八期出光興産㈱店主室教育研修開始
四月十九日　㈱新出光宗像神社春祭大田権宮司外神職二名出向奉仕
テレビ東京「町おこし村おこし～ふるさと新発見」取材の為日経映像ディレクター飯島修司並俳優大和田獏氏来社
四月二十日　神社本庁総長白井永二氏外三名参拝
但馬古代文化ルーツを探る会五〇名来社
四月二十二日　第四十八期出光店主室教育研修終了
四月二十三日　大電木工㈱代表取締役秋山孝行氏外五九名参拝
四月二十四日　沖・中両宮春季大祭青宮祭
四月二十五日　沖・中両宮春季大祭
四月二十六日　沖縄石油精製㈱代表取締役社長川崎勝氏外一名参拝
秋山幸衛氏夫妻参拝
四月二十八日　出光興産㈱広島支店販売一課長飯野氏外三名参拝
四月二十九日　昭和祭
四月三十日　京都女子大学生三〇名学会員研修の為来社

宗像大社歌会 俳句作品集（三七四）

ひかりケ丘　南　萬里
青梅の闇に裸身の水子仏

藤　沢　井上　玄洋
音もなく渚を洗ふ春の波

福　間　森　清
ホームレスの黒き帽子や寒戻る

福岡中央　力丸　玄風
山門の飛龍雲呼ぶ春の雨

自由ケ丘　細川　絹子
春の浜潮みつまでの小さき貝

日の里　花田いつ枝
満開より二分の寧けさ花の道

田　熊　力丸　一郎
日に白く風になぶられ雪柳

若　松　井手　清隆
海峡の男渦女渦の若葉風

（続）浜の寄物 86

対馬へ

いしいただし

翌日は醴泉院の安藤和尚の案内で下県の残りの部分を巡った。まず標高三五七メートルの上見坂展望台へ。眼下に大小六〇余の島々が浮かぶ浅茅湾の眺めは最高である。ただ前日の大荒れの天気はまだ残り、風も強くて寒い。水溜りは薄く氷が張っていた。早々に退散。鶏知から城山へ。神功皇后伝説の城とされていたが、七世紀後半に築城された金田城である。

椎根浜の漂着物

七世紀後半、朝鮮半島は大きく揺れ動く。六六〇年には唐・新羅によって百済は滅ぶ。六六一年には百済再興に斉明女帝自ら軍を率いて筑紫へ。しかし女帝は筑紫・朝倉宮で崩御された。六六三年日本と百済の連合軍は朝鮮半島白村江で唐・新羅の連合軍と戦い敗北。日本書紀は「大唐、便ち左右より船を夾みて、官軍敗ぶれぬ。水に赴きて溺れ死ぬる者おほし」と。旧唐書は「その舟四百隻を焚く、煙焔、天にみなぎり、海水、皆赤」と伝えている。

筑紫へ逃げ帰った日本・百済軍は唐・新羅の追撃を恐れ全力をあげて防衛を固めた。まず六六四年、対馬、壱岐、筑紫国に防人と烽（のろし）を置く。また太宰府の前方に大きな堤を築き（濠を掘って）水を貯えた。水城の大堤である。六六五年には長門国に城を、筑紫には大野城市と粕屋郡宇美町にまたがる）及び椽（基肄）・佐賀県三養基郡基山町）を築く。朝鮮式山城である。六六七年には大和の高安城（奈良県生駒郡と大阪府八尾市の境）、讃岐国の屋嶋城（香川県高松市屋島）とここ対馬に金田城を築いた。

金田城は標高二七五メートル。石塁が約三キロにわたって残存している。また谷の口には城戸と呼ばれる城門址が三ヵ所あり、門礎も残っている。登山口のところには城の見取図と説明板が立っていた。頂上まで登れば全体がつかめるのだが時間もないので、登山口のところで記念撮影をする。

さて幸いにして、唐・新羅の侵攻はなかった。しかし白村江の敗北から三五六年後の一〇一九年（寛仁三年、五十隻の舟で刀伊（女真族）が対馬（小茂田浜へ上陸）次いで壱岐・筑前・怡土・志摩・早良郡を荒し回った。刀伊の入寇である。この時、筑前太宰府の権帥（ごんのそち）藤原隆家が家来を引きつれ奮戦している。それから二五五年後、文永十一年元軍が小茂田浜に上陸、守護宗助国はここで討死。弘安の役（一二八一）から一三八年後の一四一九年（応永二六）には和寇に手を焼いた李氏朝鮮国では兵船二二七隻で対馬を襲っている。応永の外寇である。まさにここは国境の島であり、防人の島でもある。

刀伊や元寇の上陸地であり古戦場の小茂田浜は、今回は立寄らなかった。車からチラリと浜が見えたが護岸や波消ブロックが投入されて狭くなったような感じであった。もっとも元寇時の海岸線は今より奥深かったと言われる。

阿連を通り、時折り山の間から見える海は白波がたち大荒れであった。吹き上げられた発砲スチロールがあまりに多きのには驚いた。

昼食は椎根でした。食堂には予約されていたので早く用意ができ、名物のソバやカジメ汁、モズクに舌鼓を打った。

金田城跡

食堂から道をはさんで海岸となっているので、少し歩いてみた。韓国製の大量漂着であった。食事を終わって対馬空港へ。一泊二日の対馬の旅は終わった。

この稿を書いている頃二つの新聞記事が目についた。西日本新聞に「ヤシの実のロマンをかき消す、漂着物の山！観光対馬の海岸、行楽客うんざり」。

毎日新聞は西表島がダムやリゾート開発によりイリオモテヤマネコが絶滅の危機にさらされていることを報じていた。私が歩いたのは下県だけだったが、多くの原生林が伐採されている対馬も同じである。ここにもツシマヤマネコが生息しているのだ。

宗像むかしばなし

維新の偉人　徳重正雄伝

明治百年を過ぎ、神郡宗像にその名を残した偉大なる人物、徳重正雄の遺徳を忍びその業績を称えたい。

弘化三年宗像郡徳重村（現在の赤間）の里に生れ、幼名を三蔵といった。彼は世に神童と呼ばれる程の人物で才智にたけていた。

安政三年、九才の時、習字並びに四書の素読を修め、十一才にして旧黒田藩士族源蔵氏に随い四書五経を学ぶ。士族月形氏に就いては皇漢大部の史学及び詩文学を修め、その修学ぶりには藩の者は唯々驚嘆するばかりであった。

文久二年三月には元服して、赤間村徳重の若き庄屋役に命ぜられたが同三年八月依願辞職する。この間に改名すること数回、二郎平、泰二郎、正巳、最後に正雄となる。慶応三年九月にまたもや庄屋役を命ぜられた。時は明治維新の頃若き彼の心は弥猛に踊っていた。

彼は単身日田の広瀬孝之助の塾に入学。ここに初めて天下の諸名士と胸襟を開くようになった。

そののち一年有余郷里に帰った彼は、五卿赤間の茶屋に滞在と聞き、時到れりとばかり歌一首に感慨を託して三条実美公に献じた。

やがて五卿が太宰府に到着、直ちに特使を以って彼に次の一首を贈られた。

如何にして筑紫の海に寄る波の　千重の一重を君につくすぞ

この間薩摩の志士西郷隆盛に会い、天下の大勢を聞いて大いに感ずるところあり、尊王開国の情いよいよやみ難いものがあった。彼は遂に福岡藩を脱走して秘かに鹿児島の造士館に入塾した。ここにいたく南州に愛され、藩費を以って衣食費を給与されていた。

或る初秋ふらりと塾を出た彼は、やがて徳重神社の境内に入った時、彼はふと心にある衝動を受けたのであった。「オオなつかしい故郷徳重の名だ！　夢にだに忘れた事のない。父母健在にましますやら」彼は懐郷の情に心迫るのをどうする事も出来ずそれから改めて徳重正雄と称したのである。

月日は去って明治三年五月福岡藩脱走の罪はゆるされ、俊才な彼は、愈々藩費を以って東京留学となる。かくて旧吉井藩の士族佐原貞一に随って経書、皇漢の歴史を研究し後外国語学校に入学独逸語を学ぶ。

明治五年には私費を以って、ついに独逸留学が許可され独逸のハイデルベルヒの経済学士レッチンゲル氏の塾に入って独逸語は勿論のこと数学、幾何、三角術、歴史、経済のあらゆる学問を修得。学問に専念すること四年間気候風土の異なる外国での必死の勉強にあわれ病魔の襲うところとなり明治九年やむなく帰国したのである。

翌年我が国では薩南の風雲急を告げて、有名な西南の役が起った。平岡浩太郎と計って病身乍ら西郷翁に応援の計画中、幸か不幸か、計画が官軍に漏れて平岡は捕われ、彼は官閥にまぎれて芦屋から船出して大阪の大三輪長平衛の家に身を隠していた。

その時大三輪氏の発起による五十八銀行創立においては、その資金六万円を福岡で募集し、創立の貢献者たるを以って初代取締役に選ばれた。

しかし病気は再び悪化して、熱海、箱根等養生にあれこれと手を尽くせども天は遂に彼を見離し、明治二十年三月十一日四十二才の若さでこの世を去った。

一世の俊傑は国家の為に尚前途幾多の為すべき身を以って福岡の病院に瞑目した。

郡下における海外留学の最初の人、徳重正雄の一生こそ、華々しくも又余りにも劇的なイバラの道ではなかったろうか。

故郷の神宝 (7)

数々の古代祭場

沖ノ島中腹の一ヶ所に、巨岩を一個一個と置き並べたようなかっこうで岩がそそり立っている所がある。そこは南面する谷間の平坦部となっており、ここが古代の祭場である。中には高さが一五mを計る巨岩もある。

四世紀に始まった沖ノ島祭祀は、国家的事業としての祭りが十世紀初頭までと続き、祭場は二十三ケ所を数えている。

▽岩上祭祀（四～五世紀）
16・17・18・19・21号遺跡の五ケ所。

▽岩陰祭祀（六～七世紀）
4・6・7・8・9・10・11・12・13・15・22・23号遺跡の十二ケ所あり、この形態が一番多い。

▽半岩陰露天祭祀（七世紀後半～八世紀）
5・14（同一遺跡20）号遺跡の二ケ所。

▽露天祭祀（八～十世紀初頭）1・2・3号遺跡の三ケ所。

古代のまつりは「一祭祀一祭場（即ち、まつりの度ごとに新しい祭壇を作り祭典を行う）」が基本である。沖ノ島では六〇〇年の間この様式の通りに斎行している。その祭場の形態が時代ごとに変化していくが、ここでは四形式に分類することが出来る。

古代の海上民であった宗像族は、縄文・弥生の時代の頃よりすでに、沖ノ島を中心とした北部九州の海上権を握っていたであろう。神の名が表している如く、玄界灘は年中偏西風が吹き荒れ、煮え滾る様に波浪が激しい海である。波間に浮くが如くにみえる小島沖ノ島は〝宗像三女神の一神〟タゴリ姫神〟が住まえる島である。古くから海神の島として祭りが繰り返されてきていた。

玄界灘の真只中に位置する沖ノ島の山頂には一級灯台が置かれ、島は今も海上航路の道標とされている。寛平六（八九四）年に遣唐使が廃止され、対外交渉の道が絶たれると、これまで続いた約六〇〇年の間の国家鎮護勅祭場の役割も終え、宗像族と大和朝廷による合同祭祀も終りをとげた。ここにおいて従来の宗像一党による氏神海神信仰へと戻り、再び宗像族による独自の祭祀へと移行していった。

島そのものが神様が住まわれる館であるため、神殿の必要性がなかったとも考えられる。その為自然崇拝と言う原始神道の祭りの形式が永く使われていたのであろう。持統四（六九〇）年に神宮は第一回式年遷宮が行われたが、それ以降内陸では、各地に社殿が造られ、神社祭祀へとその形態も変化していった。しかし、島では旧来どおりの祭りが続いていたのであろう。

江戸時代に書かれた「沖津宮防人日記」（青柳種信著）によると、沖津宮本殿の周囲には空濠がまわっていると記載されている。福岡藩では転封と同時に沖ノ島に警備兵を置くが、島では全て宗像の神官の流儀により行う、と記している。宗町時代も後半に入ると島にも社殿が築かれ、神職も常駐するようになり、ここでも社殿祭祀へと形態が移ったのであろう。

〈松〉